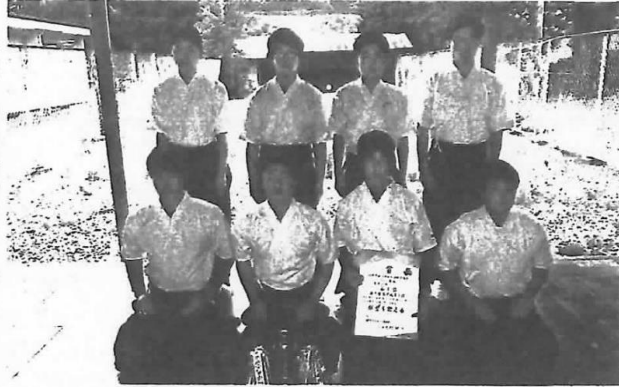


1射の重み胸に練習

31年ぶりの全国高校総体出場を決めた
駒ヶ根工業高校弓道部 駒ヶ根市で



31年ぶり県高校総体団体V

県高校総体の弓道男子団体(3日、長野市)で、1987年以来31年ぶり2度目の優勝を果たした。実力校との接戦を勝ち抜いた自信を胸に、全国高校総体(8月2〜5日、静岡県袋井市)の晴れ舞台に立つ。決勝トーナメント進出を懸けた1、2回戦の苦戦が快進撃の糧になった。全32校中、出場権を得られるのは8校のみ。各校5人ずつによる計40射の結果、駒ヶ根工を含む5校が的中数23で8位に並んだ。1人1射による競射の末、強豪の長

駒ヶ根工業高校弓道部

ロッカールーム



野日大との対決を4―3で制し、最後の1枠を手にした。「あの勝利で勢いに乗れた」と主力の蟹沢契太選手(3年)が振り返る通り、チームはトーナメント初戦の準々決勝で伊那北を17―11で破り、準決勝では優勝候補の長野吉田に14―12で競り勝った。決勝は中野西に16―9で快勝。選手たちは「先輩方が築かしてきた長い歴史を実感する」と優勝の喜びをかみしめる。昨年の県高校総体準々決勝で優勝校の塩尻志学館と同点の末、競射で惜敗。以来、1射の重みを胸に刻んで練習を重ねた。顧問の矢部誠一教諭(41)は「弓道は他者との勝負ではなく、己との勝負。普段通りの実力を出せば結果はおのずと付いてくる」と話す。全国大会まで1カ月半。部長の松田涼平選手(3年)は「決着の外的な自信をチーム全体で共有して勝負に臨みたい」とさらなる飛躍を誓う。(長谷部正)

この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

【許諾番号】 20180626-21327